

「私」につながる旅のヒント

教室を一步飛び出す旅から、地域を巡りながら学ぶ旅、さらには自分が生まれ育った環境とはまったく違う場所に飛び込む旅まで、高校でもさまざまな旅があり、そこには思わぬ出会いがあります。さあ、生徒を旅に送り出しましょう。

※記事中の生徒の学年は取材時(2023年度)

取材・文／笹原風花

Case /

1

「旅」は身近なところにも。日常から一步踏み出すワクワクが、思わぬ気づきや内省につながる

東葛飾高校 (千葉・県立)

教室から一步飛び出して、五感を使って「!」と出会う

「こっちが陽葉でこっちが陰葉かな。陽樹と陰樹ってのもあったよね?」

「このナツミカン、食べてみる?」

「あそこに鳥がいる。あ、メジロだ!」

「先生、ドングリって食べてもいいですか?」

この日の生物基礎の授業は、校内での野外自然観察。生徒たちはマップとスマートフォンを手に、教室を飛び出す。マップは生物基礎を担当する飯島 章先生が作成したもので、

東葛飾高校のキーワード

- #教室から一步出る
- #授業に取り入れる旅
- #1時間の旅
- #フィールドワーク
- #知的好奇心を刺激する
- #小さな旅
- #日常を非日常に
- #五感を使う
- #実物に触れる

校内のどこにどのような樹木や植物が植わっているかが、簡単な解説とともに記されている。また、スマートフォンを持っているのは、「はなも



く散歩」というアプリ^{*}を使うため。これはNPO法人リトカルが制作しているもので、樹木に取り付けられた二次元コードを読み込むと、植物や生物についての解説をテキスト・イラストで見られたり音声で聞けたりする。リトカルの担当者が公園や学校を巡って情報を収集したうえで作られているため、東葛飾高校の校内マップとも連動している。

1コマの授業のほとんどを自然観察にあて、生徒たちは班ごとに校内を自由に散策する。都市部の高校には珍しく、同校の広い敷地内では、クロマツ、ケヤキ、メタセコイヤ、ナツミカン、クスノキ、スタジイ、シダ類などさまざまな植物を観察することができる。ただ観察するだけでなく、「実際に触れて、匂いを嗅いで、食べられるものは食べてみて、五感で体感してほしい」と飯島先生は言う。

「これ何かわかる？」

「ここにあるのがダニ室。ダニが葉っぱの栄養を吸ってるんだよ」

「日本のキンモクセイは、雄株しかない。中国から雄株だけを持ってきて、挿し木で増やしていったんだ」

「森林インストラクター」の資格をもつ飯島先



嶋田遥斗さん(左)、久山逸成さん(右)

生は、生徒の様子を見てまわりながら、問いかけたり解説を加えたりしていく。生徒の一人は、「飯島先生の解説は面白い。へえ、そうなんだって、知らなかったことを知れるのは楽しい」と話す。また、「アプリの解説や先生の話があることで、自分たちで見ているだけだとスルーしそうなことにも気づける」という生徒も。なかには一見すると生物には関係のなさそうなものに興味を示す生徒もいるが、「それもよし」と飯島先生。まだ酸っぱいナツミカンをかじったり、拾った木の棒で腐葉土を掘り起こしてみたり、生徒たちのイキイキした姿を前に、「“え!”という驚きを伴う経験があると、知識に対する理解が深まるし、記憶にも残る。何より、対象物に対して親しみが湧く」と飯島先生は言う。

先生の言葉や仲間の姿から、 気づきや内省が生まれる

1年生の嶋田遥斗さんは、寄生虫に興味をもったことをきっかけに、生物の授業が好きになった。また、同じく1年生の久山逸成さんは、一時期ベランダ菜園にハマった経験があり、農業にも興味がある。そんなふたりは、野外自然観察でどのようなことを感じたのだろうか。

「野外自然観察は、夏に続いて2回目でした。前は青々と茂っていた葉っぱが今回は全然なくて、当たり前なんですけど、葉って落ちるんだな、樹って生きてるんだなと実感しました。僕は座学も好きですが、教科書や図録で見たことがある



※「はなもく散歩」はこちら。
<https://hanamokusampo.jp/>

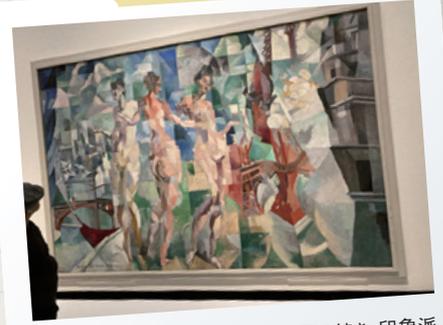




野外自然観察ではバナナの木を見つけた生徒も。よく見ると実がなっている。



野外自然観察でナツミカンの木に群がる生徒たち。この後、ミカンを実食。



嶋田さんと久山さんは、キュビズム展に続き、印象派の絵画展も見に行ったそう。

ものを自分で観察するワクワク感は、フィールドワークならではのだと思います」(嶋田さん)

「教科書などに載っているのは標準的な色やサイズのもので、実際は同じ種類でも多様性があるんだと改めて感じました。例えば、ツバキの花は赤いと認識していましたが、実際は少し品種が違うだけで花の色が全然違って。やっぱり実物を見ないとわからないことってあるんだと思いました」(久山さん)

また、野外自然観察を通して、ふたりにはそれぞれ新しい気づきや内省が芽生えたようだ。久山さんはこう振り返る。

「普段はあまり行動的な印象がなかったクラスメイトが、松ぼっくりを濡らしたら傘が閉じるらしいと聞いて、すぐにやってみていたんです。その子の意外な一面が見えたし、見聞きして納得して終わりじゃなく、自分もやってみる、考えて動いてみることって大事だよなと思いました」

嶋田さんは、飯島先生から「キンモクセイには雄株しかない」と聞き、ある考えが頭に浮か

んだという。

「以前に読んだ小説にキンモクセイが描かれていたのをふと思い出して、あれってもしかして作品の主題を象徴的に表したものだのかも…と思えてきて。夢中になってあれこれ考えていたら、班のメンバーに置いていかれていました(笑)」

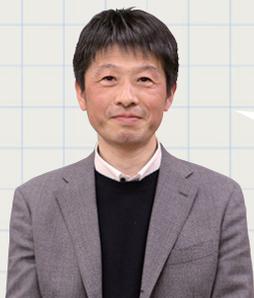
旅に出よう。でも、変容はすぐ起こるとは限らない

嶋田さんと久山さんは普段から仲が良く、夏休みには東京・上野の国立西洋美術館で開催されていた「パリ ポンピドゥーセンター キュビズム展 美の革命」を訪れた。そこで「感動を飛び越えて、打ちのめされた」と嶋田さん。久山さんも、「絵の具の質感とかサイズとか色の感じとか、伝わってくるものがスマホ越しに見ていたときは全然違って圧倒された」と言う。「実物にしかない力」に魅了され、美術館や美術鑑賞の面白さを知ったふたりは、その後、



他の展覧会なども見に行くようになったという。
生物の授業の野外自然観察、美術館での作品鑑賞という小さな旅でも、日常から一歩踏み出すことで、自分の中に何らかの変容が

生まれる…のか？ そんな問いに対して嶋田さんは、こう答えてくれた。「刺激を受けたときは自覚していなくても、後々、変化に気づくこともあると思う」



先生に聞いた！

大事なものはワクワク感。
学びの旅を、生徒にも

理科(生物)教諭 / 飯島 章先生

現

在は初夏と冬の年2回、生態系の単元を学ぶ前後に、野外自然観察を実施しています。実物を観察して理解を深めるのはもちろん大事なんですが、優先しているのは期待感やワクワク感。外に連れ出すことで生徒のフットワークは軽くなりますし、知的好奇心も普段より高まります。そして、生徒が自分で問いをもって答えを探しに行くシーンをつくることも、野外自然観察の目的の一つです。ですから、観察中は、もう少し解説したいことがあっても、ヒントや問いだけ出して、生徒が自分で解を見つけられるようにしています。ときには、そこまで考えていたんだ…と、生徒の言葉にハッとさせられることもあります。私自身もやっていて楽しいですし、生徒の「え、そうだったの!？」という驚いたり納得したりする反応や、教室とは違うイキイキした姿が見られるのは、教師としての喜びややりがいにもなっています。

私はもともと構造生物学が専門で、生徒に教えるために植物や生物について勉強するなかで生態系に興味をもち、サイエンス・リーダーズ・キャンプや研修会などに参加するようになりました。新しい場所で新しい分野を学んだことで、出会いや気づきがたくさんあって、学びの旅に出ることの大切さ、そして楽しさを私自身も感じてきました。いつもとちょっと違う環境に身を置いてみることの価値を、生徒にも伝えていきたいと思っています。

学校データ

1924年開校。校是は「自主自律」。制服がないなど自由な校風が特徴の、併設型中高一貫教育校。進路重点校に指定され、地域の医療を担う人材を育てるための「医歯薬コース」の設置、「東葛リベラルアーツ講座」の開講など、キャリア教育や進路指導にも力を入れている。



Case / 2

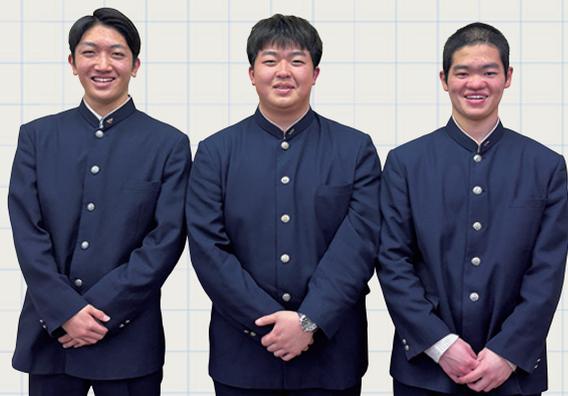
学校を飛び出して地域や社会とつながり、 本当に好きなこと、やりたいことと出会う

むかわ
鶴川高校 (北海道・道立)

地域を巡って課題を探り、 見つけた課題を探究する

「野球がやりたくて鶴川高校に来たんですが、『むかわ学』を通して、自分が本当に好きなこと、やりたいことを見つけられました」。そう話すのは、卒業を目前に控えた3年生の佐々木颯大さん。「むかわ学」では、大好きな「馬」をめぐる旅を仲間と共に続けてきた。

「むかわ学」とは、鶴川高校が2017年度より取り組んできた探究学習のこと。地元・むかわ町について知り、地域が抱える課題について探究する。1年次は、「むかわとつながる」をテーマに、むかわ町の歴史、自然、福祉、



佐々木颯大さん(中央)とゼミで共に活動した
佐藤柊斗さん(左)、古田航希さん(右)

鶴川高校のキーワード

- # 学校から一歩出る
- # 巡検
- # 地域探究
- # チームワーク
- # 自己理解
- # 課題解決
- # 地域を知る
- # 学校を飛び出す
- # 好きが出发点

農林水産業、観光などについて学びつつ、課題の見つけ方や探究の手法について学んでいく。重点を置いているのが「巡検」だ。学校を飛び出して地域のさまざまな場所を巡り、地域で何が起きているのか、どこを探究の課題として切り取るのか、課題に対して自分たちには何ができるのかを探っていく。具体的には、恐竜の化石発掘体験、漁業や農業の視察、干潟に飛来する渡り鳥の観察などを行い、訪れる先々で地域の人々のリアルな声を聞く。生徒たちは、実際に見聞きするなかで現状の取組や課題に触れ、自分が探究したい課題を見つけていく。

2年次のテーマは、「むかわを深める」。取



り組みたい課題が近い生徒同士が「ゼミ」を
組み、ゼミごとに地域や行政、高大連携によ
る大学生らのサポートを受けながら探究活動
に取り組む。さらに3年次は、「むかわを動か
す」をテーマにゼミ活動を深め、ゼミによっ
ては商品開発やイベント企画などのアクションに
つなげる。秋には「むかわ町への提言発表
会」が行われ、自分たちが考えた課題解決
策を地域の大人たちの前で発表する。

大好きな「馬」をめぐる 旅を通して、夢を見つける

佐々木さんはむかわ町で生まれ育ち、小



コラボレーションの窓口は役場になるため、むかわ町役場の担当者とは打ち合わせを重ねた。



ウマ娘のパネルがついに完成。むかわ町長との記念の一枚。

© Cygames, Inc. All Rights Reserved

学4年生のときに道内の別の地域に引っ越し
た。馬好きの魂は、幼少期に芽生えたものだ
ったという。

「毎朝、保育園に行くときに、牧場に寄って
馬を見ていました。そのころから馬が好きで、
今では競馬も好きです。むかわ町は競馬用
のサラブレッドの生産で有名なのに、道内
でもあまり認知されてないんです。純粋に馬が
好きという気持ちと、むかわ町の馬のことをも
っとみんなに知ってほしいというのが、僕の
出発点でした」

2年次のむかわ学では、同じ野球部の仲間
とゼミを組んだ。探究テーマを話し合っていた
ときに拳がったのが、『ウマ娘 プリティーダー
ビー』（以下、ウマ娘）だった。仲間の中に、ウ
マ娘好きがいたのだ。

「馬についてやりたいと僕が言ったら、馬つ
なかりでウマ娘の話が出たんです。しかも、
生産牧場のことを調べていたら、隣の日高地
区の牧場がウマ娘とコラボしてパネルを設
置し、ファンがたくさん見に来ていると知
って。自分たちも町を盛り上げるためにや
ってみようと、ゼミのテーマが決まりました」

そこから佐々木さんたちは、即座に行動に
移った。先にウマ娘とのコラボを実現してい
た日高総合振興局に問い合わせ、情報を入
手。ウマ娘の著作権をもつ会社に連絡し、
企画を提案した。さらに、むかわ町役場の
職員の協力により、町の予算を確保。ウマ
娘のパネルを設置できる場所を探し、交渉
した。そして、ついに「むかわ町×ウマ娘」
のコラボが実現。今年2月に、町内の道の
駅や観光協会の施



設にウマ娘のパネルを設置した。

アポ取りや許可申請の電話をするのも、プレゼンテーションをして自分たちがやりたいことを伝えるのも、佐々木さんたちにとっては初めての経験だった。臆することなく主体的・意欲的に動けたのは、「自分たちがやりたいからやっていた」からだと言う。

「授業だからと仕方なくやっていたら、ここまでできなかったと思います。実際に動き出してみたら手応えが得られたことも、大きかったですね。やりたいという強い思いがあれば実現できるんだと、どんどん気持ちに乗って行って、想定外のことが起きたときもみんなで話し合っ

て乗り越えられました」

そして、佐々木さんは、馬をめぐる旅を通して将来の夢を見つけた。

「両親とも教員で、自分も教員になるつもりだったんです。でも、むかわ学で馬のことに取り組んで、行政や牧場関係のいろんな人とつ

ながって、やっぱり自分は馬が好きだ、馬に関する仕事がしたいという気持ちが強くなっていきました。今は、馬の買付や種馬の交配といった仕事に興味があります」

巡検から得た気づきと 自分の関心事を結びつける

巡検から気づきを得て、旅の一步を踏み出した生徒もいる。2年生の栗山結衣さんと渡辺のえるさんだ。

「巡検で地域のいろんなところを回ったのですが、ふと、むかわ町のことで地域の人たちも知らないんじゃないか、知らないのは交流がないからなんじゃないかと思ったんです。ちょうど、高齢者と自分たちの世代の交流がないことが気になっていたので、他世代交流の場づくりに取り組むことにしました」(栗山さん)

さっそく栗山さんは、若者と高齢者の交流会を企画。渡辺さんも参画し、これまでに2回、



むかわ町への提言発表会には、地域の大人や役場の方も訪れる。



他世代交流会の取り組みについて発表する栗山さん(手前左)と渡辺さん(手前右)。



JR日高本線の終着駅「鶴川」。風情あるH100形気動車が走る。

イベントを開催した。

「難しかったのは人を集めることです。特に2回目は冬休みで、高校生が全然集まらなくて。地域の方から、既存の高齢者向けのイベントに高校生が参加するのもいいんじゃないかと

ご意見をいただいたので、今後の参考にしたいと思っています」(栗山さん・渡辺さん)

栗山さんと渡辺さんの「他世代交流」をめぐる旅は、まだまだ続きそうだ。



先生に聞いた!

探究は、人生という旅を 営み続けるためのもの

教務・むかわ学担当 / 木村亮仁先生

本

校では、探究学習の目的や意義は、そのプロセスを通して卒業後も学び続ける力を身につけることにあると考えています。校長の言葉を借りると、探究は「人生という旅を営み続ける力」を身につけるために取り組むもの。いろんな人とつながり協働しながら課題解決に努め、自走できるようになることを目指しています。シチュエーションや関わる人が変わること、同じテーマ・内容でも、生徒の取り組み方や学び取るものは変わります。だからこそ、学校の外に飛び出してこそ得られるものがあるのだと思っています。

これまで「むかわ学」では、生徒に「地域の課題を起点にテーマを設定せよ」というミッションを与えてきました。生徒の主体性や意欲をより高めるために、今後はこれを、「自分のやりたいこと」を起点にテーマを設定し、それを地域課題の解決につなげる、むかわ町に何が還元できるのかを考える…という流れに転換していきたいと考えています。まさに栗山さん・渡辺さんのゼミは自分たちの関心事と巡検から得た気づきとを結びつけてテーマ設定をしており、これからの展開が楽しみです。

学校データ

1952年創立。「明るく豊かにたくましく」を校訓に、テーマ別学習「チャレンジスタディ」や「むかわ学」を通して机上だけでないリアルな学びを展開。「地域みらい留学」参画校で、道外からも生徒を募集している。学校があるむかわ町は、国内最大の全身骨格化石(恐竜)「むかわ竜」で知られる。



Case / 3

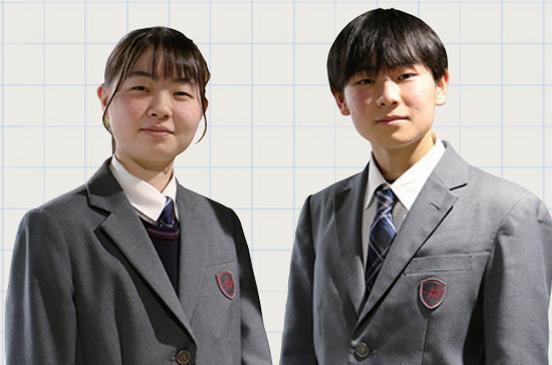
日本各地を旅するスタディツアーで、 自分の「あり方」を問う

新渡戸文化高校（東京・私立）

旅をきっかけに自分を知り、 プロジェクトが始まる

「旅では都会の当たり前の外に出る経験が多く、今までの価値観にとらわれずに、未来をつくる大人にたくさん出会えた。そして、私は私らしく生きれば良いと思えるようになった」。こう語る3年生の大澤結穂さんは、1年次の秋に、スタディツアーで三重県熊野市二木島を訪れた。

スタディツアーとは、生徒自らつくる探究型の修学旅行。高1・高2合同で実施される。新渡戸文化高校には探究進学、フードデザイン、美術の3種類コースがあり、どのコースで



大澤結穂さん(左)、近藤櫻仁さん(右)

※FSC認証：世界的な環境管理林業の認証。二木島の速水林業が国内で初めて取得した

新渡戸文化高校のキーワード

- # 非日常に身を投じる
- # 自律
- # 日本各地への旅
- # 問いを生む旅
- # 主体的な学び
- # 生徒がつくる
- # 自己理解
- # 当たり前を覆す
- # 課題解決
- # 憧れの大人と出会う

もスタディツアーの実施はあるが、探究進学コースでは、長期休暇中の任意参加ツアーを含め、年に2回以上旅することができる。行き先は国内に十数エリアあり、期間や時期、内容はそれぞれ異なる。生徒は自分が行きたい場所を選び、何を学びたいか、どんな経験がしたいかを、事前に受け入れ先の大人たちに伝え、自分たちで旅をつくっていく。環境問題や林業、農業に関心があった大澤さんは、日本で初めてFSC認証^{*}を取得した林業の事業所があることから二木島を選択した。

滞在中、最も印象に残ったのが、意外にも空の美しさだった。

「朝や夕方の空も星空も、すべてが綺麗で感



動してしまって。東京では空を見上げることがなかったなと思い、学校の屋上から空を見上げるプロジェクトを立ち上げました。課題解決のためとかじゃなく、純粹にワクワクした気持ちからでした。学校に宿泊する許可をもらうために企画書を書いて…前例のない取組のため、先生方に相談しながら進めていきました」

学校に宿泊したことを機に防災に関心をもった大澤さん。「防災と学校を掛け合わせたら何ができるか」と考え、学校で防災食を試したりもした。動き続けるなかで脳裏に浮かんだのが、二木島の学校のことだった。20年ほど前に休校になり、校舎は災害時の避難所になっているが、普段は使われていない。卒業生である地元の人たちからも、「何かしたいとは思うけど、何もできていない」という話を聞いていた。そこで、防災について地域の人に知ってもらう活動を学校でやる、というアイデアを提案。大澤さんにとっては自然な流れだったが、結果的に、人口減少に関する課題解決プロジェクトに発展した。

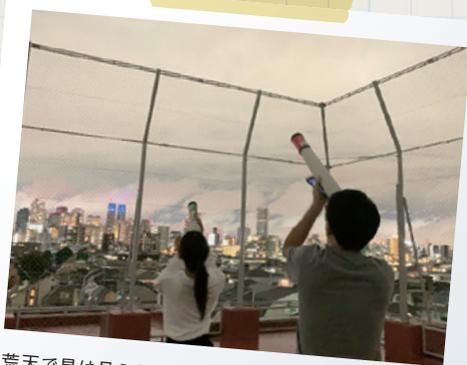
2年次の3月、大澤さんはスタディツアーで再び二木島を訪問。災害時の避難経路を映像化して流したり、浸水時の想定水位を壁に投影したりして、地域の人に見てもらった。

「空間演出が得意なメンバーを巻き込んで、プロジェクトを進めました。その後、地域の方から、この学校での思い出の写真を投影できないか、という提案があつて。卒業後ですが、今年の5月に二木島に行って、実現させる予定です」

スタディツアーをきっかけに、さまざまな活動に主体的に取り組んできた大澤さん。自分で



大澤さんの心を奪った、二木島の空。早朝に漁師さんに連れられて漕ぎ出した海も、印象深い。



荒天で星は見えなかったが、学校に泊まり、手作りの望遠鏡で空を眺めたのは忘れられない思い出となった。

も変化を実感している。

「自分から行動するようになって、自分は何か一つに絞るのではなく、幅広くいろんなことに興味がある人間なんだと気づきました。そして、挑戦を重ねるなかで、自分一人ではできないことも誰かと力を合わせることでできると、つながりや共創の大切さを実感しました。ワクワクすることに飛びついて、そこからどんどん広げていくのが自分らしいし、それでいいんだ。そう自分を肯定できるようになったのは、周りに頭ごなしに否定する大人がいなかったから。特に、どうやったらできるかを一緒に考えてくれた先生方の存在は、大きかったです」



都農町では、町の魅力を知るために町内を散策。東京にはないものや空気をたくさん感じ取った。



浦幌町では町で起業した人にも話を聞いた近藤さん。「起業」のイメージがガラリと変わった。



再び訪れた二木島の学校では、災害時を想定してテント生活を体験。メスティンで防災食も調理した。

豊かさってなんだろう？ 旅に出て、価値観が覆される

1年生の近藤櫻仁さんは、1年次の春に、スタディツアーで北海道浦幌町を訪れた。現地の人との交流や酪農体験のほか、事前に依頼して町長の話も聞いた。東京で生まれ育ち、観光地以外の地方のまちを訪れたのは初めての経験だった。

「東京での便利な生活が豊かだと思っていたんですが、スーパーマーケットもない電車も何時間も来ない不便な浦幌のほうが、豊かな感じがして。なんで自分はこんなに浦幌に惹かれているんだろうって考えて、気づいたんです。ないものは補い合う、助け合うという空気、僕たち外部の人間のことも個として捉えてくれる空気が浦幌にはあるって」

東京に戻ってからは、自然と「東京の生活に疑問をもつようになった」という近藤さん。「温かみがなく、仕組みばかりがある」と感じるようになったと言う。次のスタディツアーでは宮崎県都農町へ。都農町の魅力を再発見す

るツアーを考えるプロジェクトに取り組み、都農町の子どもたちと東京の子どもたちがお互いの暮らしを体験する「日常の交換ツアー」を提案した。

「都農町の子たちは東京に憧れているけど、僕は浦幌や都農のような田舎暮らしがうらやましくて。東京の日常を体験してもらうことで、自分たちの地域の魅力に気づいてほしいという思いで企画しました」

その後、近藤さんは、趣味の野球観戦で球場のゴミ問題が気になり、「つい欲しくなる再生利用可能容器」を企画したり、多様なパフォーマーからなるエンターテインメントチームの活動をPRすることで障がいについて考える機会を設けたりと、自らプロジェクトを次々と立ち上げ活動中。校外の大人との接点もたくさん積み上げていった。「何か新しい出会いがあるたびに、スタディツアー、自分のプロジェクト、学校の授業など、これまでにいろんなところで得たもの同士がつながり、流れるようにどんどん広がっていく感覚がある」と近藤さん。「プロジェクトを自分で動かすのは大変だけど、

すごく楽しい」と目を輝かせる。

「スタディツアーでこれまでの価値観が覆されたり、障がい者や支援者の人とつながること
で初めて気づいた視点があったりして、自分

の中で社会、世界の見え方が変わりました。
そして、自分ももっと社会に対してアクションが
したいと思うようになりました。今、とてもワクワク
ワクワクしています」

先生に聞いた!



自分たちでつくる旅が、 自律と内発的意志を引き起こす

副校長・高等学校教育チーフデザイナー /
さんとうりよぶん
山藤旅聞先生

子

どもはみんな、「～したい」という内発的な意志をもっています。それを引き起こし主体的な行動につなげるためには、自分に刺激を与えてくれる憧れの大人との出会い、そして、自分の当たり前の外にある経験が重要になると思います。そんな出会いや経験ができるのは…と考えるなかで辿り着いた答えの一つが、「旅」でした。本校が目指す自律型学習者を育てるという観点も意識し、「自分たちでつくる」をコンセプトにスタディツアーの設計を始めました。非日常が経験できる旅であればどこでもいいというわけではありません。新しい未来をつくろうと奮闘している大人がいるところ、根底から価値観が揺さぶられるような都会ではできない経験ができる場所、私たちが旅に込める想いに共感や理解をしてくれる人がいるところを、旅先にしています。

旅先でどう過ごすかは、事前にオンラインで現地の人とやり取りをしながら、生徒たち自身が決めます。こちらが組んで提供するプログラムでは、自律や内発的な意志は弱まります。現地には生徒たちだけで、米と味噌と寝袋だけ持って行きます。これも、自律や内発的意志を引き起こす仕掛けです。安全面や緊急時の対応は徹底し、現地の方々とのやり取りも教員が裏で支えますが、あくまでも主体は生徒。ですから「スタディツアーに行かない」という選択も可能にしている、あえて東京に残って自分がやりたいことに取り組む生徒もいます。

学校データ

1927年創立。初代校長の新渡戸稲造氏が目指した教育を軸に、「Happiness Creator」を最上位理念に掲げ、自律型学習者の育成を目指す。「すべての主語を生徒にする」をモットーに、個別最適化学習、教科横断型の学び、社会課題に挑戦する学びをコンセプトにしたカリキュラムを展開する。

